

社福評 福祉事務所・児童相談所部会幹事である
岩手県本部 宮古市職労の大越 公さんから
現地報告を送っていただきました。

@@

震災から3週間経ちました。
宮古市では、ガソリンスタンドの渋滞もなくなりました。
被害の大きい地区では、電気・水道などのライフラインが復旧していないところも
ありますが、徐々に日常を取り戻しつつあります。
市役所も今週から電気が復旧し、通常業務も並行して行っています。

上記を踏まえ、被災地現場の一組合員として、課題・要望を書きたいと思います。
避難所でも食事は3食取れるようになり（栄養のバランスは別にして）、
徐々に落ち着きを取り戻しています。

その中で出てきている問題が、医療・介護の問題です。
精神・知的障がい者、認知症のある高齢者が、最初の数日間は避難所で生活できましたが、
徐々に心身のバランスを崩してきて、徘徊・興奮・奇声をあげるなどの行動が
見られるようになってきました。
精神科病院に入院受け入れをしてもらっていますが、徐々に限界に達しつつあります。

我々は普段から接していますのである程度理解していますが、
避難所にいる一般市民は病気のことを理解しているとは限らないので、
精神障がい者・認知症の高齢者を「避難所から出してほしい。」と避難所職員が詰め寄せられ、
排他的になってきているのも事実です。
住まいを失った要介護者が、避難所では物資等が不足していて
満足に介護サービスを受けることもできません。

また、障害・介護のグループホームなど地域の生活拠点となっていた住家が津波で流され、
行き場所を失っている障がい者・高齢者も出てきています。
今は特養施設・老健施設に一時避難的にいますが、
次の行先探しにケアマネージャーが奔走してもなかなか受け入れ先がありません。
同様にり地域の保育所も津波で流されており、保育士はいても保育する場所がない、とい
う実態もあります。
地域に強力な大企業がないため、民間の力で施設を建てることはほぼ不可能だと思います。

障がい者・高齢者・両親を失った子ども。

上記のような社会的弱者を受け入れる社会資本が、残念ながら不足しています。被災地の多くが、人口3～4万の市と1～2万の町村が点在している地域です。比較的社会的資本が集まっている市部の介護施設も、常に空き待ちの状態であり、家族から施設入所の要望があっても、どうにもならないなかなか難しい状況です。内陸部の施設で受け入れ可能な施設もあるようですが、車で2時間かかるという距離がネックです。

避難所生活が長くなるにつれ、上記のような医療・介護の問題が噴出するかと思います。

福祉・介護の専門家が揃っている自治労社福評の皆さんに、ぜひご支援をいただきたいです。

福祉・介護職場共にマンパワー不足はその通りですし、施設も足りません。

介護職員の賃金の助成や施設の定数の一時的緩和など、

社会的弱者と言われる人々が安心して地域で生活できるような措置を

国に働きかけていただければと思います。

社福評 福祉事務所・児童相談所部会幹事

岩手県本部 宮古市職労 大越 公